２０２３年度
スポーツ推薦入試
（健康プロデュース学部 こども健康学科）
小論文（100 点・90 分）

資料を読んで、以下の問いに答えなさい。

問１ 筆者の意見が明確になるように、本文全体を 400 字程度で要約しなさい。

問２ 筆者の意見に対して、あなた自身はどのように考えるか。あなた自身の経験した具体的な例やエピソードを挙げながら 500 字程度で述べなさい。

【資料】

二十年ほど前になるだろうか。あるシンポジウムで、日本のデザイン界の重鎮ともいうべき方と同席した。目の前のマイクをさして、「これをラッカーで黄色に塗るでしょう、するとマイクはまったく別の存在になってしまいます」、と。

デザインのこの定義にはうなった。ファッションデザインなんかを考えるともっと分かりやすいかもしれないが、モノの、あるいはひとの、表面を変えることで、それに接するひとの気分が変わり、取り扱いが変わる。つまり、関係がごろっと変わってしまうのである。

現代を代表するデザイナーのひとり、深澤直人さんもまた、デザインとは「サーフェスの変形」だと言う。サーフェスとはやはり「表面」ということだが、このときにはじぶん以外のものとの接点、もしくはそれにふれたときの感触というニュアンスがより強い。サーフェスを変えることで、ひとのふるまいが変わる。何かをしたくなる、何かをさぐりにゆく、身体がむずむずする……。

その深澤さんは、ある著作の中でとても大切なことを言っている。建築から番組制作まで、おざなりなデザインというのは、どこかひとを軽くあしらったところがある。「『こんなものでいい』と思いながら作られたものは、それを手にする人の存在を否定する」というのである。

そして、深澤さんはこう続ける。人間は「あなたは大切な存在で、生きている価値がある」というメッセージをいつも探し求めている生き物だ。だから、「これは大事に使わなければならない」と思わせるもの、あるいは逆に「手に取った瞬間にモノを通じて自分が大事にされていることが感じられる」もの、それがよいデザインだというのである。

いろいろ思い当たるふしがある。わたしが通った小学校は、明治のはじめに造られた古い小学校である。何度か改築されたのだろうが、わたしたちの教室があ

った本館は当時のままである。通っているときには気づかなかったが、先日四十年ぶりに訪れて、おどろいた。段差の小さい階段は大理石、手すりは彫りをほどこした木製の柔らかい手ざわりのものだった。子どもたちは無意識に、おとなたちがじぶんたちを大切に思っていることを、校舎をかけずり回りながら、肌で感じていたに違いない。

歩いていていい街だなあと感じる時にも、同じような思いに浸される。掃除が行き届いているということもあろうが、それも含めて、住民がじぶんたちの住む場所を大切に思っているらしいということが、そこかしこで感じられる街は、どこか風格がある。

人間についてもきっと、同じことが言えるのだろう。もうどうでもいいと、じぶんの身体を傷つけたり、自暴自棄になったりするのは、じぶんのことを大切に思えないような状態の中にいるということだ。じぶんを大事に思う気持ち、これは昔から「自尊心」と呼ばれてきたが、「自尊心」もまた、他人に大事にされてきた、ていねいに扱われているという体験を折り重ねるなかで、じぶんは大切な存在なのだと知らされるところからしか生まれてこない。

たしかにいまの子どもはたっぷりと玩具を与えられる。ぬいぐるみ、積み木、子ども用のカラオケ、ゲーム機、合成繊維、ビニール、プラスチック……。ほとんどの玩具が、深澤さん流の言い方をすると、「こんなものでいいでしょ」という感覚で作られている。はたして、ここからはどんな「自尊心」が生まれるだろうか。

心理学者の霜山徳爾さんがある料理人の言葉として紹介しているのに、こんなのがある。「ものの味わいの判る人は人情も判るのではないかと思いやす」。じぶんのために働いてくれるひとへの思いがないと、味は分からないというのである。じぶんのために何かをしてもらっている、じぶんがていねいに、そして大事に扱われている、そういう体験こそが、いつか「自立」のための、栄養たっぷりの腐葉土になるのだと思う。

（出典）「デザインの思想」鷲田清一 『噛みきれない想い』角川学芸出版